The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	あとがき
Author(s)	森田, 敦郎
Citation	未来共生学. 2016, 3, p. 202-212
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56257
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

あとがき

森田敦郎
大阪大学大学院人間科学研究科准教授

共生の二つの次元

本特集のきっかけとなったのは、2014年に本プログラムがトロント大学と共同で開催した第一回「未来共生トロント大学多文化研修」における受講生の発表であった。すでに本誌で繰り返し紹介されているように、受講生たちは、トロント大学の教員と学生も参加する成果発表会で、彼らがトロントで学び経験したカナダの「多文化主義」と日本の「共生」を比較する発表を行った。

この発表は、とくにトロント大学の教員の間に鮮烈な印象を与えた。オオツキ・佐塚、およびフェイニグらが述べるように、受講生たちは二つの経験を付き合わせることで、カナダ的な「多文化主義」を独自の角度から検討した。それは、「共生」との比較を通して、多文化主義が前提とする「文化」、「民族集団」、さらには人間中心の概念化のあり方について批判的な光を投げかけていた。

トロント研修でのこのような遭遇を経て編集された本特集には、主に三つの観点からの論文が収められている。ひとつは、「多文化共生」や「多文化主義」の概念を批判的に検討したもので、栗本とマッケルヒニーの論文に代表されるものである。これらがそれぞれの概念を歴史的、知識社会学的に検討したものであるとすれば、脇阪と榎井の論考は、制度化された「多文化共生」に先行し、今でも各現場で営まれている「共生」の実践についての反省的な検証である。そして、第三の論考は、「多文化主義」と「共生」概念の遭遇に注目したもので、比較に焦点を当てたオオツキ・佐塚、フェイニグら、高原の論考がそれにあたる。

こうして整理すると、本特集の主要な問いが「共生」概念の二重性を軸に発展してきたことが見てとれる。栗本と榎井によれば、共生の概念は、「多文化共生」として現れる時には、日本におけるポスト植民地状況がうみだした諸問題——帝国解体後の国籍問題とそれに起因する在日韓国・朝鮮人への制度的周辺化、それに伴う差別など——を覆い隠す効果を持つ。一方、脇阪は、多文化共生に先立って草の根的に生まれてきた本来の「共生」概念は、日本人と在日韓国・朝鮮人、後者の中での韓国籍を持つものと朝鮮籍を持つものの間の政治的な分裂といった複雑な差異を再編し（「折り合いをつけ」）、共通の目的のために共に働く中から生まれてきたことを指摘している。「多文化共生」は公式の政策概念という点で「多文化主義」と同等だが、これに先行する「共生」は、公式のスローガンの中ではなく、現場での実践的なやりくりの中に存在するという点で、多文化主義とは大きく異なっている。

この「あとがき」では、このような共生の二元的な特徴に注目して、本特集の論点の相互関係を筆者なりの視点から整理してみよう。ここで焦点を当てるのは、次の三つの論点である。第一のものは、栗本と脇阪の論考を結ぶものである。そこでのキーワードは、差異の再編を通して「マイナーになること」である。第二の論点は、榎井とマッケルヒニーが論じた少数派の地位向上のための実践と政策の間の複雑な関係である。第三は、モハーチ・今井の序文、オオツキ・佐塚、フェイニグら、高原が論じた比較をめぐる諸問題である。この三つの論点のつながりの検討を通して、未来共生イノベーター養成プログラムについての実践的かつ概念的な示唆を得ることが、本「あとがき」の目的である。

マイナーになること

栗本、榎井、脇阪は共通して共生の問題の核になるのは、マジョリティとマイノリティという固定された枠組みが揺らぐ瞬間である

と指摘している。栗本は、「日本人」と称されるマジョリティは、実際には様々な側面でマイノリティである多様な人々の集まりにすぎないと指摘する。自らのマイノリティ性を自覚すれば、ほとんどの人は国籍や障害などのために不利益を被っている人と同じ立場に立つことになり、それらの問題をとりまく構図は大きく変化するだろう。この指摘に続いて栗本は、いかにして人がマイノリティとしての認識を持ちえるかについて、次のような示唆的な例をあげている。

> 私は人類学者であり、南スーダンやエチオピアでの経験が長いので、「日本人」としては特殊なのかもしれない。（中略）大学教員である私は、若者である学生たちと付き合っているのだが、彼らとのあいだに感じる心理的ギャップが、南スーダンの知り合いとの付き合いの場合よりおおきいことがしばしばある。つまり、南スーダン人より日本の若者のほうが「異人」なのだ。
>
> （栗本本誌: 82-83頁）

ここで栗本が、「特殊だ」と感じているのは、日本の若者よりもスーダンの長年の友人を近く感じるという、差異の感じ方である。ここでは、栗本は「日本人」という集合よりも、彼の人類学者としてのこれまでの人生の中で形成された「栗本＋南スーダンの（特定の）人々」という集合により親近感を感じている。ここでは、彼が南スーダンの友人たちと共有した生活史に基づいた新たな共同性が生じており、この共通性に基づいて彼らと若い日本人の間にある差異が強調される。ここでは、国籍や人種をめぐる一般的な言説が生み出す「国の違い」という差異は、生活史を通して全く異なるものへと再編されている。

栗本が自らを「特殊」と感じる理由のひとつには、こうして再編された差異のあり方が、他人にとっては全く自明でないためである。「栗本＋南スーダンの（特定の）人々」という集まりが可能になるような差異（と共通性）の編成は、彼らの生活史を共有しない人々にとっては理解困難である。つまり、仮に学生たちにこのような集合性を理解させたければ、栗本がこの差異の編成がいかにして成り立っているのかを説明しなければならない。このように説明責任を当事者が負っているという点で、「栗本＋南スーダンの（特定の）人々」という集合性は、「日本」のように自明視され、説明が不要な集合性とは異なっている。マイノリティはしばしばマジョリティに対して自らを説明しなければならないという知見と照らし合わせれば、これは典型的なマイノリティであると言える。

哲学者のジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリは、差異が再編されていくこのようなプロセスを「マイナーになること／マイナー性への生成変化（becoming-minoritarian）」と呼ぶ（ドゥルーズ＆ガタリ 1994）。栗本が言うようにマジョリティであることはその内部での差異の忘却から成り立っており、そこに属する人にとっても属さない人にとっても、マジョリティのあり方はある種の所与である。一方、「栗本＋南スーダンの（特定の）人々」のような集合性は、マジョリティからの二重の逸脱を意味している。第一にここで栗本は、マジョリティである「日本人」から自らを差異化している。と同時に、新たに見出された「栗本＋南スーダンの（特定の）人々」という集合は、「日本人」というカテゴリーが前提とする枠組——マジョリティとしての「日本人」とマイノリティである「外国人」の対比——からも逸脱している。

ドゥルーズとガタリは、それゆえこのような集合性の形成を、マイノリティ集団の形成とは区別して「マイナーになること／マイナー性への生成変化」と呼ぶ。このようにマジョリティとマイノリティという枠を抜け出して、「マイナーになる」ことは、ある種の創造的な行為である。それは、共有されたプロジェクト（この場合は栗本のフィールドワークと、それと関わる平和構築などの活動）の中で、自らを取り巻く差異のあり方を再編することによってはじめて可能になる。そして、栗本の差異の再編が彼と友人たちの間の共同性をもたらしたように、このような差異の再編は共同的に行われる。ダナ・

ハラウェイは、当初は異なっているように見え、そして実際も異なり続けている人々や人と動物が、こうしたカテゴリーを横断した共同性を作り出すことを、「一緒になること（becoming with）」と呼ぶ（ハラウェイ 2013）。

脇阪は、このような差異の再編が、草の根的な社会運動における共生の誕生と密接に関係していることを示唆している。川崎における在日韓国・朝鮮人の貧困と周辺化の問題に取り組んだこの運動で重要な課題となったのは、日本人と在日という境界を乗り越えることだけでなく、在日の住民の間に存在する断絶を乗り越えることだった。そこでは、地域生活の改善のための継続的なプロジェクトを通して住民の間の差異が徐々に再編され、日本人と在日韓国・朝鮮人、民団系と総連系という二つの境界を横断するような共同性が生み出されてきた。共生という言葉は、本来、単なるマジョリティとマイノリティの共存ではなく、この二項対立から抜け出して、「マイナーになる」創造的なプロセスを指していたのではないだろうか？

カテゴリーの政治

共生概念の二重性及びその難解さ・曖昧さは、それが「マジョリティとマイノリティの共存」と「マイナーになること」――マジョリティとマイノリティを横断することで両者を規定する二項対立の枠の外へ出ること――の二つを意味しているからだと思われる。前者が「多文化共生」として積極的に取り入れられてきた一方で、後者は実践の中のいわば暗黙の理念として受け継がれてきた。栗本、榎井、脇阪が指摘するように、両者の間の緊張関係は、共生を理解するという分析的な意味からも、その為の制度、組織、活動を構想するという実践的な意味からも重要な意味を持っている。

カナダの多文化主義の歴史は、二つの共生の緊張関係を理解する上で示唆に富んでいる。カナダ側の執筆者は、繰り返し多文化主義政策と固定的なカテゴリーの間の政治的な関係に注目している。オオツキ・佐塚は、多文化主義政策の下では資金や支援は、民族カテゴリーに基づいて分配される傾向があるため、この政策は逆にこれらのカテゴリーを固定化する危険があると指摘する。同様にマッケルヒニーは、多文化主義政策が補助する対象となる活動のカテゴリーの変遷を指摘する。1980年代以降、多文化主義政策が資金補助の対象とする活動は、より個人主義的に、より産業の利害に近いものへと変化しており、それらの補助金を必要とするNGOなどの活動はそこから大きく影響を受けてきたという。

多文化共生政策の焦点が、コスメティックな多文化主義を促進するものになってきた背景には、支援対象となる人々と活動を規定する二種類のカテゴリーの働きがあると考えられるだろう。このようなカテゴリーをめぐる政治と、現場で受け継がれてきた暗黙の理念としての共生がいかに絡み合い競合しているのかを明らかにすることは、共生に関する今後の研究において重要な焦点となるだろう。だが、この絡み合いと競合を理解するためには、捉えどころのない共生の概念についての理解を今一歩進める必要があるように思われる。

遭遇としての比較

そのための鍵となるのが、オオツキ・佐塚、フェイニグら、高原の「比較」についての考察である。古典的な実験計画法から、クロス集計表まで、比較は科学的方法の基礎となってきた。だが、トロント研修を通して受講生達が学んだことは、抽象的で外的な基準を設定して多文化主義と共生を比較することは不可能であるということであった。このような外的な基準による比較の困難は、1970年代から人類学では広く知られており、比較は長年人類学では不人気な方法であった。だが、2000年代以降、比較についての新たな見方が登場してきた。この見方は、科学者や農民、機械工や医師など人類学の研究対象となる人々が、日常生活の中でいかに比較を用い、それを通して状況を理解し、知識を生み出すかに焦点を当てる。そして、これらの研究が特に注目したのが、概念、物、テクノロジーなどが移動の

末に出会う、遭遇の場面であった（Mohácsi and Morita 2013; Morita 2014）。

オオツキ・佐塚は、多文化主義と共生が研修の中でいかに遭遇し、多様な比較を生み出したのかについて詳細な検討を行っている。この遭遇は、プラクティカルワークの中で共生の現場を経験した受講生が、カナダで多文化主義の現場に赴くことによって生じたものである。トロント大学の教室とフィールドワークは、受講生に対してカナダの多文化主義と彼らのプラクティカルワークの経験を比較する機会をもたらした。この比較こそが、多文化主義に対する新たな視点をもたらしたのである。ここで重要なのは、受講生達は比較に際してすでに、暗黙の理念としての共生の経験を持っていたという点である。それゆえ、この比較は当初からマジョリティとマイノリティという枠組みから抜け出そうとするポテンシャルを持っていたのだ。

このポテンシャルは、高原の多様な比較によく表れている。高原は、多文化主義と共生の理念が内包する要素、「home」という名詞と「住む」という動詞、それらが結びつけられている国家アイデンティティのあり方など多様な比較を行った。この比較は、品詞の区分を越えるだけでなく、多文化主義と日本国憲法第9条など、新たな予想外の比較に道を開いていった。このように、「遭遇としての比較」は直感に反する新たな比較のペアを生み出す（Morita 2014）。そこでは、何が似ていて、何が異なるのかということ自体が再構成される。ここで生じる差異の再編は、まさに栗本の事例で示された「マイナーになること」と同じものである。栗本の例では、生活史をとおした差異の再編の結果「日本の若者」と「栗本＋南スーダンの（特定の）人々」という、国籍カテゴリーを横断する新たな比較のペアが生じている。一方、高原の例ではトロントへの旅を通して、新たな景観、新たな人々、新たな語りとの遭遇が生じ、「似ていること」と「異なっていること」についての感覚自体が再編されている。

このことは「遭遇としての比較」が「マイナーになること」を捉える上での分析的かつ実践的な視座を提供しうることを示している。第一に、暗黙の理念としての共生を理解するためには、マジョリティとマイノリティのカテゴリーから抜け出す――それゆえ、我々の通常の思考のカテゴリーからも抜け落ちてしまう――「マイナーになること」のプロセスを把握することが必要である。「遭遇としての比較」は、このような探求の入り口となるだろう。

一方、トロント研修でモハーチらが学生に促した比較のエクセサイズは、受講生と教員がともに、「マイナーになること」を経験し、実践する手段となりうる。オオツキ・佐塚が指摘するように、比較することは、目の前の差異をいかに異なる形で配置できるのかを反省的に考えることである。これは、受講生がプラクティカルワークでの経験を、反省・言語化するための方法となる。トロントで行ったような比較のエクセサイズは、捉えどころのない現場での共生を言語化するための「練習」ともなる。

このように「遭遇としての比較」は、本プログラムの研究と教育をつなぐ結節点となる可能性を秘めている。さらに、それは、本プロジェクトの将来展望を考える上でも重要な意味を持つように思われる。

比較をとおして動くシステム

「遭遇としての比較」の持つ二重の意味をいかに活用するかという問いは、未来共生プログラムを、どのようなタイプの活動、組織として捉えるかという問題と関わっている。これは、反省的であると同時に実践的な問いでもある。教員と受講生が、このプログラムをどのような性格のものとして理解するか、ということはカリキュラムと授業をいかにデザインし、それにいかに取り組むかということと密接に結びついている。それはまた、それらを授業や海外研修を支える事務的な作業といかに結び付けるかということにも関わる。プログラムをどのようなものとして概念化するかは、我々が個々の活動や業務をどのように全体の中に位置づけるかを通して、実際の活動に大きな影響を与えうるのである。

オオツキ・佐塚は、トロント研修における「遭遇としての比較」が、研修の現場だけでなくその舞台裏にも見られたことを指摘している。二つの大学の極めて異なった事務システムを結びつけ、研修を共同実施することは、プロジェクトの企画と運営の中心となった佐塚とモハーチにとって想像を絶する煩雑な作業であった。オオツキ・佐塚が指摘するように、この共同作業自体が、大学において時間と場所がどのように概念化され、（賃金や借料と言う形で）計算されるのかを比較することであった。と同時に、これは契約書や資金の支払いといった形で二つの大学が文字通り接触する瞬間であった。このことは、「遭遇としての比較」が実務的な意味を持つことを意味している。比較を通して、二つのシステムの間の妥協点が探られなければ、そもそも二大学の間の契約は不可能だったのである。

このような形で、異なる事務的・教育的なシステムが接触する場面は、トロント研修に限られたものではない。幅広い学際性を持つことを前提に発足した副専攻プログラムである本プログラムには、八つの研究科が参画している。そのため、カリキュラムの構築と運営に当たってはこの八つの研究科それぞれと本プログラムのカリキュラムとの間の複雑な調整が不可欠である。そのため、教務ワーキング・グループは、当初膨大な時間を八つの研究科のカリキュラム、指導体制、教員のスケジュールなどを互いに比較し、理解し、妥協点を探る作業に費やした。

さらに、副専攻的なプログラムであるというリーディング大学院の特徴は、学生にもこのような絶えざる比較を課す。受講生達は、所属研究科のカリキュラムおよび論文指導と未来共生プログラムのそれらを同時にこなす必要がある。この同時進行は、必然的に研究科と未来共生プログラムとの間のカリキュラム、指導体制、伝えようとする知識の性質の間の比較を絶え間なく引き起こす。

少なくともリーディング大学院のような副専攻型の営みが完全に定着するまでは、これらの比較は、既存のカテゴリーを横断する思考を要求する創造的なものであり続けるだろう。未来共生プログラムは研究科ではないため、両者の調整は既存のカテゴリー（研究科）の間での調整になることができない。このことは事務職員と運営担当教員に多大な負担を強いるものだが、その結果として担当者は大学の組織のあり方について従来とは違う特異な見方を発展させる。既存のカテゴリーを横断するこうした「マイナーな」視点は、プラクティカルワークやトロント研修のような新しいタイプの活動を生み出すためには不可欠なものであった。

これらの点を総合すると、未来共生イノベーター養成プログラムを、このような絶えざる比較を通して教育・研究上のイノベーションを行っていく新しいタイプの組織として構想することができる。この組織が存続するためには、他の研究科、プラクティカルワークの現場となる多様な組織、そして海外の大学との間の絶え間ない遭遇の中で、比較を通して自らのあり方を調整・変容していかなければならい。一方、このような「遭遇としての比較」は、この組織がその目的である「共生を可能にするイノベーターの育成」という目的を達成するための中心的な手段ともなる。「遭遇としての比較」は、一筋縄では捉えがたい共生の実践 ——「マイナーになること」をとおして、異なる人々がともに生きる環境を作ること——を学び経験するための入り口となる。と同時に、それは、このプロセスを分析的に理解するための研究にとっての出発点ともなる。

本特集号の多様な論考を貫く糸は、未来共生プログラムの将来がこの「遭遇としての比較」をいかにハンドルするかにかかっていることを示している。この比較は、概念的であると同時に実践的であり、技術的であり、事務的であり、教育的でもある。オオツキ・佐塚が描き出すように、「遭遇としての比較」は、多くの場合折り合わないロジックの間の軋轢の産物である。それゆえ、未来共生プログラムは、スムーズには運行しないシステムである。それは軋轢と摩擦、部分的な故障と応急修理の中で動く奇妙な機械に例えられるかもしれない (Morita 2014)。だが、その軋轢と故障こそが、我々に本プログラムが目指すもの ——「マイナーになること」による共生——に迫る

ことを可能にするのである。遭遇と軋轢の中から絶えず比較のビジョンを生み出すこのプログラムが、「未来を生み出す機械」になることができるかどうかは、我々がこのダイナミズムをどう扱うかにかかっている。

参照文献

日本語

ドゥルーズ、ジル & フェリックス・ガタリ
1994 『千のプラトー』河出書房新社。

ハラウェイ、ダナ
2013 『犬と人が出会う時』高橋さきの訳、青土社。

英語

Mohácsi, Gergely and Atsuro Morita
2013 Traveling Comparisons: Ethnographic Reflections on Science and Technology. *East Asian Science, Technology and Society* 7 (2): 175-183.

Morita, Atsuro
2014 The Ethnographic Machine: Experimenting with Context and Comparison in Strathernian Ethnography. *Science, Technology & Human Values* 39 (2): 214-235.